

日本労働年鑑 第55集 1985年版
The Labour Year Book of Japan 1985

第二部 労働運動

XII 公害反対闘争

8 土壌汚染公害反対闘争

安中公害東京連絡会の結成

群馬県安中市の東邦亜鉛安中精錬所から四〇年余にわたって排出されたカドミウムをふくむ鉱煙、廃水によって田畑を汚染された被害農民のたたかいは、現地では群馬地評などの労働組合が支援してきたが、東邦亜鉛本社、監督官庁の通産省・農水省・環境庁ならびに安中公害控訴審訴訟係属中の東京高裁などのある東京においても、支援の運動がひろがり、東京地評、千代田区労協、中央区労協、消団連、農業関係労組や研究者などの団体・個人、原告団、弁護団が中心となって、一九八三年七月一九日、「安中公害東京連絡会」を結成した。

安中公害東京連絡会は、「安中公害被害農民とともに、安中公害の全面解決のために運動をすすめ、公害から農業を守り、国民の食糧の安全性確保のために活動する」ことを目的とし、毎月例会をもって、東京における安中公害反対運動をひろめるための要としての役割を果たしている。

安中公害と日本の農業を考える三・一七シンポジウム

東京における安中公害反対闘争運動を発展させるために、一九八四年三月一七日、安中公害東京連絡会が主催して、「安中公害と日本の農業を考える三・一七シンポジウム」を東京で二四〇人の参加のもとに開催した。このシンポジウムでは、農業問題や重金属汚染問題の研究者、農民作家、消費者代表、安中農民代表らがパネラーになり、世界的な食糧危機が叫ばれている状況のもとでのわが国の農業問題、食糧・食品の安全性の問題など、安中公害問題を中心に幅広く食糧問題を論じあった。また、アピールを採択し、「(1)群馬県安中市にあって、四六年余にわたり東邦亜鉛の公害と闘い続けてきた安中農民の苦悩と生きざまは、わが国の農村と農民の象徴的な姿であること、(2)安中農民の要求と闘いは、国民全てが人間として健康に生きるための基本的条件を実現する要求と闘いに直接結びつくものであること、(3)このような観点から、加害企業東邦亜鉛に対し、裁判所によって故意責任を認定された重大性を深く自覚し、すみやかに被害農民の要求に全面的に応え、公害で汚染された全ての土壌の完全な復元と公害根絶のために万全の措置をとることを要求する」と宣言した。

神通川流域イタイイタイ病被害地のたたかい

富山県神通川流域では三井金属神岡鉱業所の排水によるカドミウムにより、多くのイタイイタイ病被害が発生し、広大な農地が汚染されたが、一九七二年のイタイイタイ病控訴審完全勝利判決以後も、患者救済、汚染農地復元、発生源対策の課題の実現にむけて取り組みがなされてきた。

一九八三年三月には、一〇年前からのイタイイタイ病原因論争むし返し攻撃のつづくなかで、一度に九人もの患者認定をかちとるという成果が得られたほか、八月二日には、三井金属神岡鉱業

所への全体立入調査第一二回目が実施され、また、一〇月二日には、第一審判決一〇周年記念事業をおこなった一九八一年以来毎年開催してきた「イタイイタイ病セミナー」の第三回目が、イタイイタイ病やカドミウム問題の権威者である七人の学者を講師として開催された。

日本労働年鑑 第55集 1985年版

発行 1984年12月15日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 労働旬報社

2001年8月21日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1985年版(第55集)【目次】 次のページ → ■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
